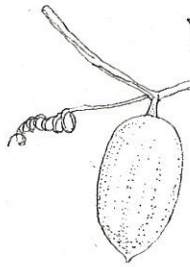


すっかんぽ

☆ 研究室だより No.4

1992年 8月号



カラスウリの花

子どものころ、廃線になった鉄道の線路やトンネルは、絶好の遊び場であった。とりわけ、人が入れないように、さくで閉ざされたトンネルの中へ忍びこみ、その先に続いている鉄橋を歩いて渡ることは、今思ってもゾッとするほどスリルに満ちた遊びだった。不安と恐怖、そして人に見られはしないかというあせりに耐えきれず、みんなでフ、と一もくさんに逃げ帰ったこともあった。そんなことをくり返していた。ある秋の日、みんなの関心がトンネルの入口の壁にはりついた、真赤な実に集まった。たくさんあるにはあるが、け、こう高いところにあって、そうはとれるものではない。壁をよじ登、とることができたのは、1人か2人ぐらいしかいなかったように思う。なかなか手に入れることのできない赤いきれいな実。それがカラスウリという名で呼ばれ、真夏の夜の間にだけ白くてきれいな花を咲かせることも、もう少し大きくな、てから知、た時、まだ見たことのない白い花が心の中で急に

輝きだしたのだ、た。

それ以来、夏になるたび、どこかでカラスウリの花が咲いていないか、心あたりを捜していたのだが、8月27日の新聞に次のような記事が載っていた。

『店先で夕涼み、カラスウリの花満開』
群馬県千代田村で、すし屋をやっている近藤健造さんの店先でカラスウリの花が今満開だというのだ。これは見に行くしかない。すぐに電話番号を調べ、電話すると、

「いつでもどうぞ、7時には咲いてますよ」という答えだった。何とか都合をつけて、8月31日午後6時ごろ、すし屋ののれんをくぐ、て、あいさつにうかがうと、カウンターでは、二人のおじさんがすでによ、ばら、ていて、「あんたは、どこからきたの? 何、佐野?」じゃ、阪神の麦倉、知、てるだろ。オレは

阪神ファンなんだよ。佐野からきたんじゃ、オレが案内す、から」と、近藤さん、そのけで、すぐ近くの庭までつれて、てくれた。

空は、少し、うす暗くな、てきた程度であ、た。

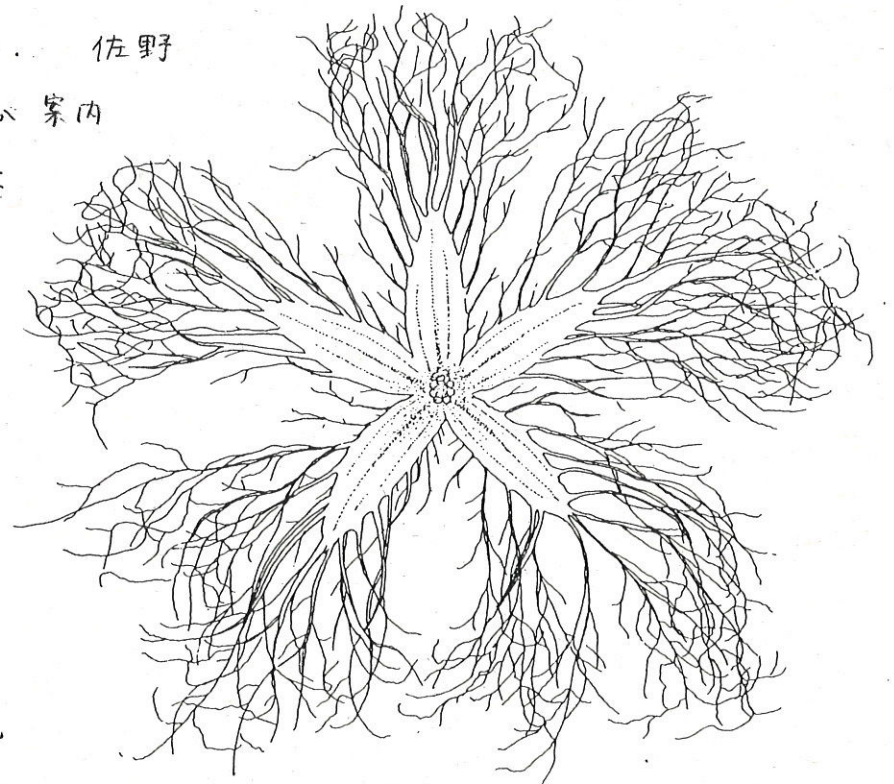


Fig. 1

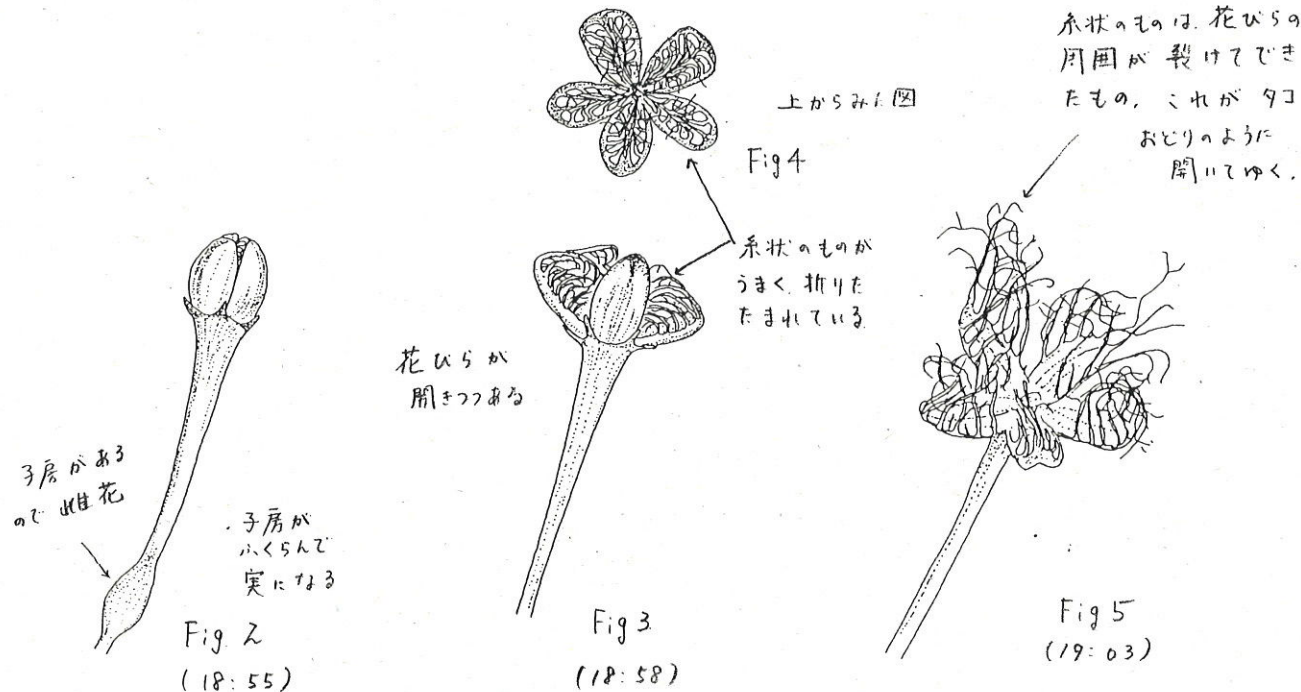
カラスウリの花
1992. 8. 31.

午後6時20分 --- 気温 26.5°C. かきねには、カラスウリのつぼみが無数についている。カラスウリには雌株と雄株があって花にも雌花、雄花がある。見分け方は、つぼみの下の方に小さなふくらみ（子房）がついている方が雌花である（Fig 2）

6時55分 --- あたりはかなり暗くなってきた。懐中電灯が必要である。つぼみの1つが少し開いてきたようである。（Fig 2）

6時58分 --- 5つの花びらが開き、それぞれの花びらの周囲に糸くずのようなものがみえる。（Fig 3）上からみると、星のようである。（Fig 4）

7時3分 --- 花びらの周囲のちぢれた糸状のものが少しづつ伸びてくる。この動きは、はきりと目で追うことができ、まさに目の前で花が動いている。秒速数ミリくらいの速さであろうか。（Fig 5）



7時10分 --- 花が完全に開く。ここまでの所要時間は15分。あ、という間のできごとだった。

あたりを見回すと、あちこちで白い花が咲いている。ざっと数えても、100以上はありそうである。懐中電灯の光に白く浮かぶカラスウリの花は、妙にふまめかしい。しかし夜が明ける前にしぼんでしまうこの花たちには、大きな仕事が残されている。雄花の花粉を雌花へと運び受精を完了

させなければならぬ。その手助けをしているのは、蛾の仲間のスズメガの一種であると言われている。その姿を確認することはできなかったが、蛾によって実を結ぶカラスウリの花は、まさに夜の女王といった感じである

ところで、阪神ファンのおじさんたち（中畑さんと村土さん）は、どうしても会いたいけど、すしを ごちそうしてくれ、次のカラオケへと直行したようであ

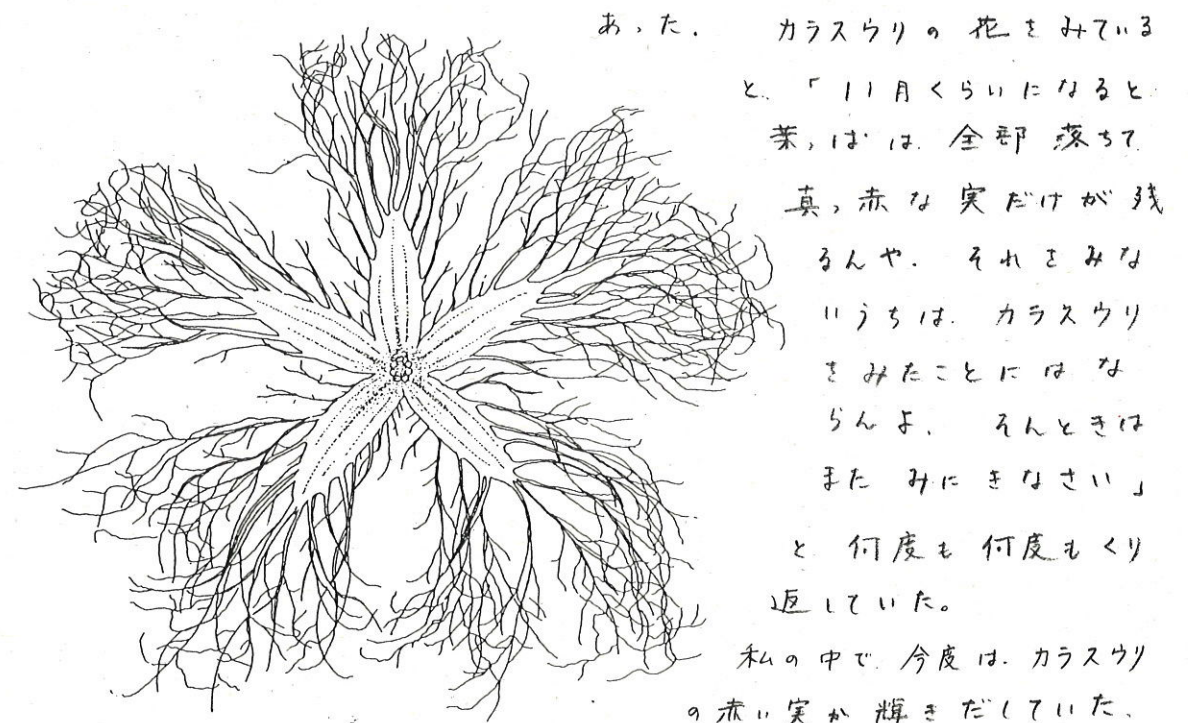


Fig 6 (19:10)

あ、た。カラスウリの花をみていると、「11月くらいになると、葉はは、全部落ちて、真、赤な実だけが残るんや。それとみないうちは、カラスウリをみたことにはならんよ。そんなときはまたみにきなさい」と何度も何度もくり返していた。

私の中で、今度は、カラスウリの赤い実が輝きだしていた。